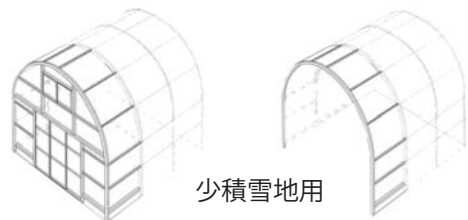
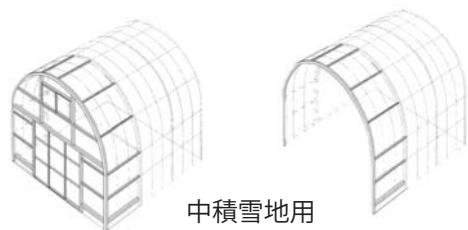


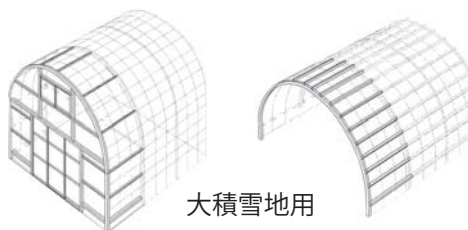
足長型ハウス組合せ



少積雪地用



中積雪地用



大積雪地用



2017(平成29)年
12月13日
水曜日



冬の農業を支えるハウス
雪の重みに耐えて、保温性にも大評判。
積雪が多い地域で冬の栽培を支える農業
用ハウスが頼もしい素材で完成した。6面



木造の耐雪農業ハウス

積雪1mを倒壊せず 保温性高く

北誠商事 独自合板で耐久性を確保



木造住宅建築の北誠商事(飯山市)は、積雪の多い地域でも使える木造の農業用ハウスを開発した。独自の手法で貼り合わせた合板から骨組みとなる木材を切り出す新工法を考案し、耐久性を確保。同社によると、積雪1mに相当する1平方メートルあたり300kgの重みでも倒壊せず、保温性も高いという。2018年1月に販売を開始。主に北信地域で需要を見込み、2年間で売上高1億円を目指す。

同社は、間伐材など曲がりがある木材でも、合板に加工すれば強度のある木材ができることに着目。13年から開発を始めた。通常の合板は建築基準法の規定から、繊維の方向をそろえて薄い板を貼り合わせるが、同社は強度を持たせるため、繊維方向が直角に交わるように何重にも貼り合わせた。技術面で協力する信州大工学部(長野市)の試験で、従来の方法より高い圧力に耐えられることを確認する。

北誠商事が開発した木造の農業用ハウス。新工法の骨組みを使い、積雪の多い地域でも使える。

北誠商事はまず、建築基準法の対象にならない農業用ハウスで新工法を商品化。今後は信大のデータをもとに、国土交通省から建築基準法の基準強度を満たす工法として認定を受け、住宅用に応用することを目指す。新工法の骨組みの商品名は「GINE XUS FRAME(ジーネクスフレーム)」と名付けられた。

鉄パイプを使う従来の農業用ハウスは、積雪の多い地域では雪の重みで倒れたり、ハウスを覆うビニールが破れたりすることが課題だった。北誠商事が飯山市内に実証用として建てた木造のハウスでは、ウスの上に1・5m近い積雪があっても耐久性に問題はなかった。

骨組みに木材を用いることで、保温性も高まる。高柳博社長によると、従来の農業用ハウスは熱伝導性が高い鉄パイプがハウス内の気温を下げる一因になっていた。熱が伝わりにくい木材を骨組みに使用すれば、ハウス内の温度を維持しやすくなるという。

信大の実証実験では、冬期の加温が必要な夏秋イチゴの栽培し、わずかな加温で収穫までこぎつけた。高柳社長は「薬物野菜であれば、積雪地域の冬期でも加温せずに収穫できる」とPRする。販売価格は1坪(3・3平方メートル)当たり7万5千円からで、鉄骨造りのハウスと比べると半額以下に抑えられるという。

同社の17年4月期の売上高は2億7千万円、住宅が9割を占める。開発したハウスは新しい収益の柱になるとみて、展示会や口コミを通じて積雪地域の農家を中心に売り込む。高柳社長は「中野市より北の地域ではこれまで、多くの農家が冬場の栽培を諦めなければならなかった。当社のハウスを使えば、安定的に栽培できる」として